

モダンクラフトクロニクル 京都国立近代美術館コレクションより

このたび、京都国立近代美術館は7月9日（金）から8月22日（日）まで、「モダンクラフトクロニクル—京都国立近代美術館コレクションより—」を開催いたします。

1963年に開館した京都国立近代美術館は活動の柱の一つに工芸を置いており、国内有数の工芸コレクションを形成してきました。加えて、当館は「現代国際陶芸展」、「現代の陶芸—アメリカ・カナダ・メキシコと日本」、「今日の造形〈織〉—ヨーロッパと日本—」、「現代ガラスの美—ヨーロッパと日本—」など、折に触れて日本との比較の中で海外の工芸表現を紹介し、日本の美術・工芸界に大きな刺激を与えてきました。本展では、当館の工芸コレクションを用いて、これまでの当館の展覧会活動の一端を振り返るとともに、近代工芸の展開をご紹介します。

本展の4つのみどころ

1. 明治の超絶技巧から創造性あふれる現代工芸まで、京都国立近代美術館の収蔵品を通じて近現代工芸の大きな流れを体感することができます。
2. 第1章では、日本の工芸史に大きな影響を与えた重要な国際展の出品作から海外作家の作品70点を展覧会ポスターとともに紹介します。

展覧会ポスター



現代国際陶芸展
(1964)



現代の陶芸
—アメリカ、カナダ、メキシコと日本—
(1971)



今日の造形〈織〉—ヨーロッパと日本—
(1976)

3. 総数306点（国内作家232点、海外作家74点）にも及ぶ膨大な名品・優品を一堂に紹介します。※会期中、一部展示替えがあります
4. 展覧会に合わせて、当館所蔵の全工芸作品を網羅した所蔵品目録を発売します。当館1Fミュージアムショップと通販にてお買い求めいただけます。

「京都国立近代美術館所蔵品目録 XIII [工芸]」

陶芸／染織／漆工／木竹工／金工／ガラス／ジュエリー／人形・その他の工芸／工業デザインと世界の工芸を総覧する1冊です。

構成 440頁
点数 3,335点（754作家）
発行 京都国立近代美術館
価格 3,900円（税込）



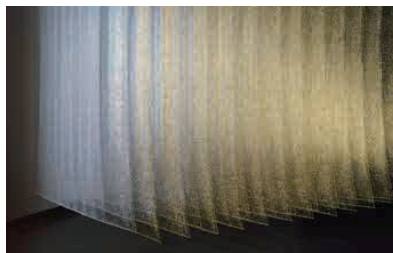
第1章 世界と出会う 起点としての京都国立近代美術館

1963年に国立近代美術館京都分館として開館した後、当館では工芸を美術館活動の柱の一つに置き、工芸に関する様々な国際展を開催してきました。これらの国際展は、同時代の世界の工芸表現の動向を紹介することで、日本の美術・工芸界に大きな影響を与えることになりました。例えば1964年の「現代国際陶芸展」や1970年の「現代の陶芸—ヨーロッパと日本」、1971年の「現代の陶芸—アメリカ・カナダ・メキシコと日本」は、当時世界一だと信じられていた日本陶芸界に対して国際的な視野の獲得を促したという意味で画期的な展覧会となり、また、1976年の「今日の造形〈織〉—ヨーロッパと日本—」、1977年の「今日の造形〈織〉—アメリカと日本—」もファイバー・ワークなどの世界の新たな表現を紹介した重要な展覧会です。その他にもガラスやジュエリー、デザインに関するものなど当館で開催した工芸の国際展は数多くあります。そして当館ではこれらの展覧会に出品された作品をまとめて収蔵しています。こうした作品群は、時代を映し出す鏡であることから歴史的な重要性を有しています。しかし同時に今日のみで見ても造形的な興味を掻き立てるものが数多く存在します。「世界と出会う」と題した本章では、当館で開催した代表的な国際展の中から展覧会ポスターとともに出品作のいくつかをご紹介します、京都国立近代美術館が日本の工芸界に果たしてきた役割と歴史の一端を振り返ります。



マグダレーナ・アバコノヴィッチ《黒い上衣V》1974年

第2章 四耕会、走泥社からクレイ・ワーク、ファイバー・ワークへ



堀内紀子《浮上する立方体の内包する空気》1977年

第二次世界大戦を経験したことは、多くの若い芸術家たちにとって自身の芸術上の方向性を大きく転換させるきっかけとなりました。そして京都は1947年に「四耕会」が、そして翌年には「走泥社」が結成されるなど、前衛陶芸の中心地となり、走泥社はその後50年間にわたり、日本の陶芸界を牽引しました。工芸史（美術史）において四耕会、走泥社が特筆されるのは、いわゆる「オブジェ」と称される実用性を排した陶芸による造形表現を追求し、世間に認知させたことにあります。現在では当たり前となったこれらの表現が登場したのは、戦後という新しい時代に生きる自己を真摯に見つめるという時代状況が大きく関係します。そして工芸素材や工芸技法による造形表現の枠が大きく広がったことにより、その後、表面的な造形性よりも、素材や技法そのものの中から表現行為のあり様を探求する作家が登場しました。こうした表現は、陶芸では「クレイ・ワーク」、染織分野では「ファイバー・ワーク」と称されました。「クレイ（土）」や「ファイバー（繊維）」という語を用いた名称が示す通り、素材の持つ物質性を新たな角度で提示し、時に作者の身体性を交えながら作品化していく創作活動は、時代を切り開く大きな力に溢れていました。これらの実験的な表現を経た現在、クレイ・ワークやファイバー・ワークといった言葉はほとんど耳に聞きなくなりましたが、そこで行われた表現行為は、今なお重要な意味を有しています。

第3章 「美術」としての工芸 第8回帝展前後から現在まで

1907年に第1回文部省美術展覧会が開催され、日本における「美術」が目に見える形で制度化されました。しかし、ここでは日本画と洋画のみが対象であり、工芸は除外されました。その理由の一つとして、西洋の美術制度に倣うことで、工芸は応用美術であると位置づけられたことが挙げられます。工芸がようやく官展に加えられたのは1927年の第8回帝国美術展覧会においてのことです。この20年の間、工芸家は、それぞれの創作性や作家性を検証していきます。そして1926年に高村豊周や豊田勝秋といった金工家を中心に「^{むけい}無型」が結成されるとともに、全国の気鋭の工芸家や大家が集まって「日本工芸美術会」が結成され、第7回帝展が開催されるのにあわせて同時期に同会場でも様々な分野から力作を集めた展覧会を開催しました。その檄文には「作家諸君は本会に於て、始めて自由に自己の真摯なる主張を「現代」に示すことを得べく、また「現代」は本会に依りて始めて工芸美術鑑賞の標準を定めることを得ん」とありました。このような動きを通じて、工芸は国の美術制度に組み込まれることになりましたが、檄文に「自由に自己の真摯なる主張」、「工芸美術鑑賞」とあるように、「美術」としての工芸のよりどころは、自己表現と鑑賞性を工芸技術や工芸素材を通じて表していくことにあり、その姿勢はある意味で今日にも引き継がれています。



豊浦省吾《海と山と空時絵立止》1931年

第4章 古典の発見と伝統の創出

工芸の世界には、「伝統」という概念が強くついて回ります。しかし、自らの目指すべき手本を発見し、それを古典とみなし、伝統という概念として意識しなおすとき、そこには近代的な感覚が働くことになります。というのも、何を古典とし、伝統と位置付けるかは、常にその時々の「現在」の視座に立ってなされるからです。この観点から工芸史を紐解くと、陶芸分野での「古典復興（桃山復興）」が重要な運動としてまず挙げられます。これは昭和初期の古窯発掘ブームと相まって、日本陶芸の求めるべき古典を「日本独自」と見なされた桃山時代の茶陶に定め、多くの陶芸家はその再現から応用へと仕事を展開していったというものです。また、1909年より発掘が始まった朝鮮半島の楽浪遺跡から出土した楽浪漆器や漆芸や染織、金工に影響を与えた正倉院宝物の研究、大正時代に日本の陶芸家も関与して再現を行った高麗青磁、あるいは19世紀末に鉄道工事の折に大量に発掘された唐三彩をはじめとする中国陶磁。さらに日本の名家に秘蔵されていた名器が売り立てを経て人目に触れるようになったことなども、日本に多様な古典を形成する大きなきっかけでした。こうした古典を研究し、創作活動を展開することで「伝統」を現代に意味あるものとして提示する作家たちの主な発表の場が日本伝統工芸展であり、その代表として重要無形文化財保持者（人間国宝）がいます。また、大正末から始まった民藝運動も、無名の工人たちによる日常の雑器等を見出し、風土性を有した古典として位置づけて創作の糧としたという点で、近代の工芸運動であるということが出来ます。



加藤土師明《明黄金瀬手菊文蓋付大師壺》1968年

第5章 新興工芸の萌芽 自己表現としての工芸

金工家で後に重要無形文化財保持者（人間国宝）となる高村豊周は、明治末から大正初期を回想する中で、新興工芸の恩人として、富本憲吉、藤井達吉、津田青楓の名前を挙げています。その理由として「工芸品を作るのに、材料には自分が使いたいものを使えばよいのだ。昔からの掟に依らなければ物を作ることが出来ないのではない」、「模様も実に自由で、蝶々とか、とんぼとか、いろいろな野の草を表現し、今まで人が振り返りもしなかった題材や材料を使って、非常に面白い効果をあげている」などと述べています。戦後に人間国宝の第一次認定を受けた富本憲吉は、色絵磁器の技法を現代的感覚で展開させた陶芸家です。しかし、この時期に富本が取り組んだのは、技術的な成熟度や様式、決まり事を重視するのではなく、アマチュア的な技術であっても、自然を見つめ、写生を通じて模様の創作を行うことでした。これは言い換えると、自己の感性に素直に従う中で制作活動を行うという態度のことです。この前例にとらわれない自由な制作態度は藤井や津田などこの時期に活躍をはじめた作家たちに共通するものであり、「近代工芸」の扉を開くものでした。加えて、忘れることができないのが後に世界的な巨匠となったバーナード・リーチです。リーチは1909年来日後、富本憲吉や白樺派のメンバーらと親交を結び、また黒田清輝らの支援を受けてエッチングや作陶活動を行います。リーチが日本に伝えたものの一つに、西洋中世の精神世界と美的世界との理想的結合のあり方があり、それは後の民藝運動にもつながっていきます。



バーナード・リーチ《楽焼大皿「兎」》1920年
© The Bernard Leach Family, DACS & JASPAR 2021 E4220

第6章 図案の近代化 浅井忠と神坂雪佳を中心に

1900年に開催されたパリ万国博覧会は、会場中がアール・ヌーヴォー様式で埋め尽くされ、装飾芸術の新時代を国内外の人々に印象付けました。この時、日本政府は『稿本日本帝国美術略史』を出版し、また帝室技芸員に作品制作を委託するなど、美術の一等国として認められるために国の威信をかけて参加していました。しかし、受賞歴を見ると、美術作品としてはフランスから高い評価を得られなかった一方で、応用美術としては評価が高く、欧米と日本の「美術」に対する認識の差を自覚させられることになりました。実はこの会場を視察した日本人に洋画家の浅井忠がいます。浅井はジャポニズムブームの火付け役の一端を担うなど、（すでに飽きられ始めていたとはいえ）欧米で高い評価を得ていた日本工芸を旧態依然であるとして厳しく批判し、日本工芸における図案の後進性を強く感じました。そして帰国後にフランスで出会った中澤岩太の誘いを受けて京都高等工業学校（現・京都工芸繊維大学）の教授として工芸図案を担当するとともに、日本画家で図案家の神坂雪佳や京都在住の工芸家らと図案研究団体の遊陶園や京漆園を結成し、新時代に向けたアール・ヌーヴォーや琳派、大津絵などの様式を取り入れた様々な図案を実作品として生み出していきます。浅井の京都時代は6年程度の短いものでしたが、浅井没後は、神坂雪佳がより日本的な美意識を強く打ち出した近代的で洗練された工芸図案を次々と考案し、同時に京都の工芸家や日本画家、図案家らと佳都美会等を結成するなど、京都の工芸界を牽引し、その近代化に尽力しました。



神坂祐吉《月之意時絵箱》大正時代

第7章 手わざの行方

明治の工芸は近年、「超絶技巧」というキャッチコピーで語られ、急激に人気が高まっています。確かにそれらの作品は緻密で細密な装飾性、実物そっくりの迫真性を有しており、工人たちの感性と技量には驚かざるを得ません。しかし明治工芸は長年、美術史においてほとんど顧みられることがなかったものです。その主な理由としては、それらの多くが万国博覧会や美術商を通じた海外向けの輸出品であり、優品が国内にそれほど残っていなかったこと、そのために装飾過剰で技巧主義的で、本来の日本の美観や特性を有していないなどの先入観を払拭できなかったことなどが挙げられます。しかし、近代美術史の研究が進むにつれて、海外からの作品の買戻しが進み、第一級の作品を目にする機会が増えたことで、それまで否定される大きな理由であった過剰な装飾性や技巧性が実は前代からの技術体系の継続性を持つものであること、そして海外からどんな欲に情報を収集するとともに、最新技術、様式を吸収し、作者自らの意図の下で改良していったものであることなどが明らかになってきました。そもそも明治工芸は、明治維新により幕藩体制が崩壊したことで、それまでの藩の保護がなくなり、自身が身につけた技巧を新しい時代に即して活用していく必要に迫られたことから始まります。そして工人たちは技巧それ自体を視覚的に作品化していくという明治工芸における一つのスタイルを確立していくのです。そのために現在、明治工芸は前近代と近代をつなぐ重要な存在として美術史に位置づけなおされています。



並河晴之《松原 晴之》明治時代

モダンクラフトクロニクル 京都国立近代美術館 コレクションより

- 会期 2021年7月2日(金)～8月22日(日) 2021年7月9日(金)～8月22日(日)
※会期中に一部展示替えがあります
前期：7月9日～8月1日 / 後期：8月3日～8月22日
- 開館時間 午前9時30分～午後5時(金・土曜日は午後8時まで)*入館は閉館の30分前まで
*新型コロナウイルス感染拡大防止のため、開館時間は変更となる場合があります。
来館前に最新情報をご確認ください
- 休館日 月曜日、8月10日(火)*ただし8月9日(月・休)は開館
- 観覧料 一般：1,200円(1,000円) / 大学生：500円(400円)
※()内は前売りと20名以上の団体および夜間割引(金・土曜日の午後5時以降)
※高校生以下・18歳未満は無料*。
※心身に障がいのある方と付添者1名は無料*。
※母子家庭・父子家庭の世帯員の方は無料*。
*入館の際に証明できるものをご提示ください
※本料金でコレクション展もご覧いただけます
- 会場 京都国立近代美術館
主催 京都国立近代美術館、京都新聞

関連イベント

《手だけが知ってる美術館 第4回 ふらっと鑑賞プログラム》

当館が取り組んでいる、「目で見ると」ことだけによらない新しい美術鑑賞のあり方を探る「感覚をひらく」プロジェクトの一環で、質感や素材に注目しながら、スタッフと対話しながら染織作品を手で触れて鑑賞する立ち寄り式のプログラムを行います。触覚をつかうことで、どんな新しい発見や気づきがあるでしょう。視覚に障害のある方も美術館が初めての方も、どなたでもお気軽にご参加ください。

- 日時 ①2021年7月17日(土) ②2021年8月21日(土)
各日とも午前10時～12時、午後2時～4時
1回の体験時間は約10～20分です。



◀ 詳細はこちら

お問い合わせ

「モダンクラフトクロニクル—京都国立近代美術館コレクションより—」広報事務局(Nene Loco.(ネネラコ)内)

- 担当 久世・和田
住所 〒531-0072 大阪市北区豊崎3-15-5 TKビル
TEL 06-6225-7885
FAX 06-7635-7587
Mail art-pr@neneloco.com